

白雲片片

第一回

石頭希遷禪師（一）

ここでは古則を中心に仏々祖々の言動をご紹介致したいと思えます。ただ個人の学習・解釈を基に書いておりますので、歴史的事実、一般的な解釈とは違ったことをお伝えすることがあるかと思えますが、その点はどうかご容赦願いたいと存じます。また、目上の方の言動を記す場合、全て尊敬語で書くことと読みづらい文章になりますので、適宜省略させて頂きます。また、ご寺族さま、一般読者に配慮した文章にするため、ご寺院さま方は言わずともご存知のような事柄でも記す場合がございますが、こちら併せてご了承下さい。

さて第一回目からは何回かに分けて石頭希遷禪師が登場する古則を紹介致します。

希遷禪師は釈尊正伝の仏法を我が国に伝えられました永平道元禪師より十六代前のお方でございまして、石上に庵を結びそこで坐禅をしておられたことから石頭禪師と呼ばれるようになったと伝えられております。また、数々の古則に登場されておりしますので古来よりとても有名なお方です。

希遷禪師は若かりしころ曹谿山の大鑑慧能禪師の下で修行中、慧能禪師の遷化に遭い、師の遺言に従って青原行思禪師に会いに行かれました。その時の行思禪師と希遷禪師の激しい問答が今日まで伝えられております。

道元禪師が長年にわたり蒐集、編纂されたとされる古則集、通称・正法眼蔵三百則（真字正法眼蔵）の第一則目に行思禪師と希遷禪師が登場されますのでここでご紹介致します。

『挙す、吉州青原山静居寺弘济禪師、曾て石頭に問う、你、甚れの処従りか来れる。頭云く、曹谿より来る。師乃ち

ほつす、ねん いわ そうけい ま シャコあり
弘子を拈じて云く、曹谿に還た這箇有り

や。頭云く、但だ曹谿のみに非ず、西天

にも亦無し。師云く、子、曾て西天に到

ること莫しや否や。頭云く、若し到らば

即ち有らん。師云く、未だ在らず更に道

うべし。頭云く、和尚も也た須らく一

半を道取すべし、全く希遷に靠ること

莫かれ。師云く、汝に向かつて道わん

ことを辞せざるも、恐らくは、已後、人

の承当すること無からん。』

以上が古則の全文でございます。

吉州というのは中国の地名で、その青原山という山にある静居寺にいた弘济禪師（行思禪師）のもとにやって来た希遷禪師に対して「お前はどこから来たのか」と質問をした。それに対して希遷

禅師が「曹谿から参りました」と答えた。曹谿というのは曹谿山のことで、行思禅師ご自身が修行され、本師・慧能禅師がいらつしやつた山の名称です。

すると行思禅師が扠子を手に取って「曹谿山にもこの扠子と同じものがあったか」と、つまり曹谿山にも自分と同じように説法をすることのできる者がいたかと尋ねた。扠子は説法の象徴です。行思禅師の本師・慧能禅師は既に遷化されておりますので、慧能禅師亡き曹谿山の様子を聞くと同時に希遷禅師の力量を試されたのだと思われまます。

それに対して希遷禅師が「曹谿山だけでなく、釈尊のいらつしやつた西天（インド）にもありません」と答えた。行思禅師は自分と同じように説法をすることのできる者が曹谿山にいるかと質問したのに、希遷禅師はわざと質問の内容をずらして、和尚さんの扠子と同じものは曹谿山だけでなく、インドにもありませんと答えた。確かに物としての行思禅師の扠子はこの世に一つしかございません。行思禅師の抽象的な質問に対して希遷禅師は具体的、物質的な意味で扠子を捉えて返答をされました。

すると行思禅師が「お前は実際には西

天に行ったことがないんじゃないか、どうなのか」と訊かれた。わざと質問をはぐらかした希遷禅師を試すように今度はより一層具体的な質問をされました。それに対して希遷禅師は「西天に行ったことはありませんけど、行けばもしかしたら和尚さんと同じ扠子があるのかもしれません」と答えた。

すると行思禅師は「お前は西天に行つたことがないじゃないか。わしの質問に対してさらに言ってみろ」と、希遷禅師に詰め寄ります。

ところが希遷禅師は「和尚さんもちよつとでいいから何か仰つて下さい。私にばかり答えさせて何も仰つて下さらないではないですか」と言い返された。それに対して行思禅師は「私はお前に対して何か言うのを嫌がつておるのではない。言つても構わないが、お前が仏道の大事に自分で気づく前に言葉で導こうとするならば、お前は今後釈尊の教えを体験する機会を失うであろう」と答えた。

この最後の行思禅師のお言葉に、文字や言葉も決して軽く見ているわけではないけれども、若い希遷禅師に坐禅を通して仏道を学んでもらいたいという意

図が含まれているのは言うまでもありません。言葉を投げかけるのは簡単だけれども、そのために仏道に真剣な若い希遷禅師が釈尊の教えから遠ざかつてしまふ場合もあるのでそういうことのないようにという、行思禅師のとても親切なお気持ちが伝わってまいります。

その後、希遷禅師は行思禅師の法嗣となり、場所を梁端に移して宗風を宣揚されました。また薬山惟儼禅師、天皇道悟禅師、丹霞天然禅師などの著名な方々を輩出され、(唐)貞元六年(西暦七九〇年)に遷化されました。

その法脈は薬山惟儼禅師を通じて綿々と受け継がれ、後に天童如浄禅師から永平道元禅師へと受け継がれ我が国へと伝えられることとなります。

次回は、儒学者の身を捨てて全財産を河に沈め、竹策を作り娘に売らせて生計を立てながら多くの禅僧に歴参し、震旦の維摩居士と称されるほどの機峰があった龐蘊居士、南嶽懷讓禅師の法嗣・馬祖道一禅師、そして石頭希遷禅師の三者が登場する古則を紹介致します。